

古代史シリーズ3

「神武東征と国つ神」



本冊子は、筆者が古代史セミナーを実施している中で、講義録を製本化したものです。

神武東征は、初代神武天皇になるイワレヒコ尊が古代大和に政権を立てるまでの国つ神との戦いと鎮撫の行程です。

古代大和政権を創り上げるにかくも苦難の軍旅であつたろうと思わせる東征の行程を通して、記紀の記述と現実にも符合する実在地を検証しながら「神武東征」を実話として学びます。

著者：情報戦略モデル研究所

井上 正和

はじめに

本冊子は、筆者が古代史セミナーを実施している中で、講義録を製本化したものです。

筆者は、以前「メーカーの田やコンサルタントが専門でした。二十年ほど前から大学での講義をきっかけに古代の文化や歴史に興味が湧き、古代史のテキストを作り講義するようになりました。

元々、素人が古代史セミナーのテキストを作る訳ですから、古事記や日本書紀（以降は「記紀」という）が読めなかったり、古代史は良く分からないと思われる初心者の方々が持たれる感覚が同様に疑問になりました。

当該古代史セミナーが以外に人気があるのは、素人の視点で不明点を解説することにあるのかもしれませんが。また、体系化されていて分かり易いとお褒めをいただきますが、元田としてシステム設計やプロジェクトマネジメントで体系化することが性癖になっていることが寄与しているのかもしれませんが。

古代史シリーズ3「神武東征と国つ神」では、神武東征は、初代神武天皇になるイワレヒコ尊が古代大和に政権を立てるまでの国つ神との戦いと鎮撫の行程です。東征の行程を通して、記紀の記述と現実にも符合する実在地を検証しながら「神武東征」を実話として学びます。

本冊子は、記紀を読み解くために、参考図書を主体的に活用し記紀で裏付けをする形で進みます。図柄はウキペディアからかなり引用しています。活用しました主要参考図書は次の通りです。

- ＋「海道東征をゆく」（産経新聞社）
 - ＋続「海道東征をゆく」（産経新聞社）
 - ＋「日本書紀」（宇治谷 孟著、講談社）
 - ＋「古事記」（竹田恒泰著、学研）
 - ＋「住吉大社」（住吉大社編、学生社）
 - ＋「神武天皇の真実」（田中英道、扶桑社）
 - ＋「神社由緒」（宇佐大社、岡田宮、志賀海神社、宗像神社） など
- 本冊子の古代史シリーズ3「神武東征と国つ神」の全体構成は次の目次にあげて置きます。

古代史シリーズ3 「神武東征と国つ神」の目次 ◎

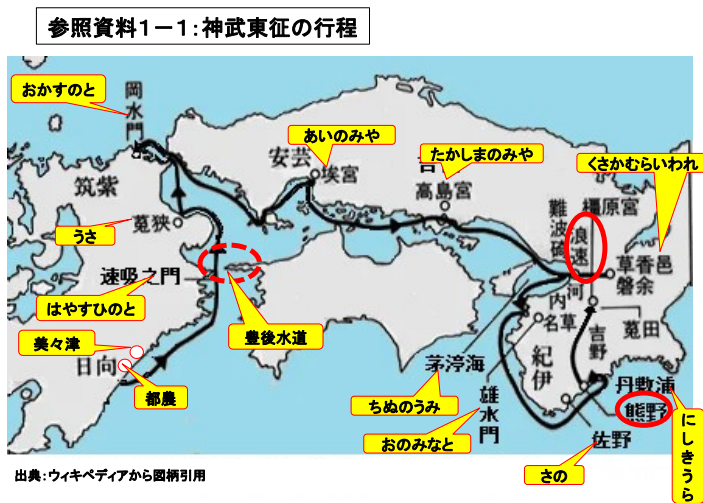
第一章 「イワレビコの出征・出立」 イワレビコ尊の生い立ちから日向における神武東征の準備に関わる神社とその伝承をたどります。	4
第二章 「岡田宮から浪速へ」 九州から瀬戸内海での国つ神との連携と神社・地域の伝承をひもときます。	17
第三章 「ナガスネヒコとの戦い」 倭の国つ神との敗戦から熊野へ回遊する苦難の行程と神社・地域の伝承を読み解きます。	26
第四章 「熊野八咫鳥の導き」 熊野から大和に至るまでの国つ神との戦いと鎮撫の行軍、そして熊野の神々と神社の伝承を解釈する。	35
第五章 「大和施政の始まり」 大和平定から東征を支えた功臣、脇役とイクスヨリヒメとの結婚までの記紀伝承をなぞる。	45
おわりに	60

◆第一章 「イワレビコの出生・出立」の目次

第一話 神武東征行程の全体概要	5
第二話 イワレビコ誕生	7
第三話 大和思慕	10
第四話 御船出	12
コラム：「神武東征で臣下として係る神々系図」	16

第一話 神武東征行程の全体概要

記紀の神武東征に記述される地名、神社、祭りなどは現在もほぼ同じ言葉や現物として残っている。この神話は最近の研究でも具体的に現実に結び付いた神話として捉えられている。記紀に記述される神武東征は、日向から出立し大和に至る行程ですが、少し奇異に感じる点があります。それは、日向から浪速（なにわ）までの行程での出来事と浪速から熊野を廻って大和に至る行程の皇軍の状態の違いである。前段の行程



は神倭伊波礼毘古尊（カムヤマトイワレヒコノミコト、以下イワレヒコという）への歓待と国つ神の支援のもとに軍を進めるが、後段の行程は敵味方が現れ、激しい戦いの行程になる。そのことは古代大和を起したイワレヒコの時代の瀬戸内海にある地域は味方、近畿と畿内は敵味方の入り乱れる地域であったことを意味します。イワレヒコはこのような敵味方相乱れる畿内において大王家として古代大和を創設するのですから、大和には強力にイワレヒコを支援する豪族がいたことが推察できます。

まず、神武東征の行程の全体像を掴んでおきましょう。全体像を掴んでおくことで、東征での出来事をより正確に把握できると思います。神武東征の開始点は日向です。九州では瀬戸内海を安全に航行するための船団、船頭や水主（かこの装備をしたと思われる）それは、豊後水道（速吸之門：はやすひのとの難所を航行し、比売大神（ヒメオオカミ…宗像三女神）を祀る現在の宇佐神宮や現在の岡田宮である岡水門（おかすのと）に逗留していることで判断できます。宗像三女神とは、宗像大社（福岡県宗像市）に祀られている三柱の女神のことです。天照大神が須佐之男命との誓約で産んだ霧から生まれたとされる女神たちで、それぞれ沖津宮の「田心姫神（タゴリヒメ）」、中津宮の「湍津姫神（タギツヒメ）」、辺津宮の「市杵島姫神（イチキシマヒメ）」です。

浪速までの瀬戸内海の航路では安芸（あき）の埃宮（えのみや）と吉備の高島

宮での滞在が長く、そして航行の難所の明石海峡や浪速の津(港のこと)がある。安芸は出雲に近く、東征当時であれば出雲支配の強い地域でした。出雲との交流と安芸の港湾の開発、国つ神(くにつかみ)の支援があり、この航路で最も強い勢力を持っていた吉備に逗留し、軍備の増強と整備を図る。両地域の豪族からも大歓待されることで強いつながりがあったことが分かる。明石海峡や浪速(なにわ)の津(港)は潮の満ち干時の波の速さがあり、その速さに対応できる熟練の船頭なしでは操舵できない難所であった。明石海峡は渦を巻いて流れ、浪速の渦は難波(なんば)と言われるほど当時は着岸が難しかった。国つ神である豪族がその熟練の船頭を手配・支援したのであろう。

一方、浪速から熊野灘を廻って大和へのイワレビコ(イハレビコ)の行程は、そこでの国つ神が敵味方に分かれてイワレビコに立ち向かう「戦いの行軍」になる。最初の戦いの難波では長髓彦(ナガスネヒコ)に敗れ、イワレビコ(イハレビコ)の長兄、五瀬命(イツセノミコト)を喪う。熊野への回航では紀伊川の河口の名草邑(なぐさむら)での戦いがあり、初勝利するが、その後の航行において熊野灘の荒波でさらに二人の兄を亡くします。イワレビコの身内がほとんど居なくなり、家臣との信頼関係で行軍を進めざるを得ない状況に陥る。熊野の丹敷浦(にしきうら)に上陸し、大和を目指すが、熊野の神の怒りに触れ全軍が気を失い倒れる。その時、高天原からの最初の救援を受ける。天照大神の命によつて、一横刀(たち)を受けて窮地を逃れ、加えて八咫鳥(ヤタガラス)が遣わされ、その導きのもとに大和に向けて歩を進める。大和に向かう途中の吉野、宇陀(うだ)、城島(きしま)、そして目的地の橿原(かしはら)に至るまで敵味方に分かれた国つ神の激しい抵抗を受けます。それぞれの場で抵抗に対処して勝利し、最後の戦いの城島(きしま)で饒速日命(ニギハヤヒノミコト)が長髓彦(ナガスネヒコ)の軍隊を引き連れ、イワレビコに帰順し神武東征の行程は終焉する。この浪速(なにわ)からの後半の行程は、イワレビコという皇軍にもかかわらず、苦難の行軍を強いられたことを記紀は記述する。おそらく、北九州の文化を持った集団が大和を目指して抵抗する敵を倒し、治めるまでの苦難の経験が言い伝えとしてあり記述されたものであろう。この苦難を具体的に記述していることにも現実性を感じとれる。

神武天皇が稲作を広めたという伝承が神武東征にはあり、水田農耕の始まりを想起させる。水田農耕は弥生時代前期に九州から西日本に普及し、生産性が飛躍的に向上する。水田耕作が導入されてからの大和の人口は急激に増加する。大和の人口は弥生時代末期、約六十万人であった人口が奈良時代前には四五〇万人になる。この弥生時代に稲作技術を広めた歴史的行動があったことは間違いない。それは神武東征の重要懸案の一つであったと考えられる。

第二話 イワレビコノ誕生

神武天皇が天皇になるまでの古事記での正式名称は神倭伊波礼毘古尊(カムヤマトイワレビコノミコト)である。長々しいので以下、「イワレビコ」という。天孫降臨をされた瓊瓊杵尊(ニギノ命)の曾孫(ひま)に当たり幼少名を「狭野尊(サノミコト)」といわれた。

神武天皇が大和に橿原(かしはら)宮を造営した際の言葉が日本書紀にある。この言葉に東征への想いが表されている。「六合(りくく)う・くにのうち)を兼ねて都を開き、八紘(はちくおう)を掩(おほ)ひて宇(い)と為さむこと、亦可(よか)らずや」とある。意味は、「四方の国々を統合して都を開き、天下を覆って我が家とすることはなほ良いことではないか」という国造り宣言である。

参照資料1-2: 平和の塔 宮崎平和台公園



出典: ウィキペディアから図柄引用



武人を表現 荒魂(あらみたま)



英人を表現 奇魂(きみたま)



英神人を表現 幸魂(こみたま)



商工人を表現 和魂(にぎみたま)

この宣言は「八紘一字(はつこういちじ)」と言われるもので、国家を家と捉え、大和朝廷を一家の主、各国を家族にし、仲良く暮らしていこうというものです。イワレビコが出生し、東征を開始する日向の宮崎平和台公園に昭和十五年の皇紀二六〇〇年を記念して平和の塔が建てられました(参照資料「1」)。

この塔の四隅には神武の四面性を表す四魂、「荒魂(あらみたま)」「和魂(にぎみたま)」「幸魂(さちみたま)」「奇魂(くしみたま)」が配されています。神道では「一霊四魂」といい、その意味は人の霊魂は天と繋がる「一霊」直霊(なおひ)と四つの魂から成り立つという霊魂観です。四つの魂とは、

- 「荒魂」とは、勇気を表し、前に進む力で荒々しさの神霊
- 「和魂」とは、親しみを表し、人と親しく交わる神霊
- 「幸魂」とは、愛を表し、人を愛し育てる、幸せにする神霊
- 「奇魂」とは、智を表し、物事を観察し分析し、悟る力を持つ知性の神霊と言われます。

イワレビコはこの四魂を強く備えた人物であったということです。

記紀から伺える東征の重要な目的の一つは、軍事行動だけではなく、当時の三大文明である「稲作」と「鉄器」、そして「灌漑技術」を伝播し、支配して行った旅ではないのかと考えられる。それは美土(うましつち)、いわゆる水稲に適した土地を求め、東征のゆかりの地で井戸を掘り、灌漑の施しをする記述か

参照資料1-3: 貝輪



出典: ウィキペディアから図柄引用

ら伺える。東征の期間は古事記では十六年間、書紀では六年間かつたとされる。この期間の違いは安芸(あき)と吉備(きび)の滞在期間が大きく影響している。古事記では安芸と吉備はそれぞれ七年、八年であるが、日本書紀ではそれぞれ二か月、三年である。長野正孝氏著「古代史の謎は海路で解ける」によれば、瀬戸内海航路が出来ていたとみるか、航路と港を啓開(港や航路を開発すること)しながら進んだのかの違いであるうと言われる。確かに安芸と吉備は瀬戸内海航路では枢要の港の地であると述べられている。

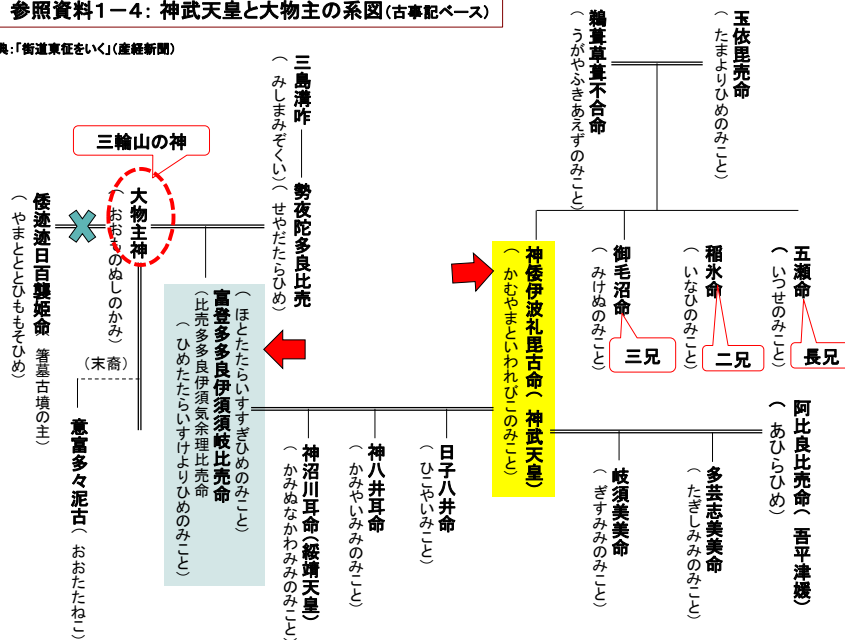
イワレビコ誕生地は日向の皇子原(おうじばる)にある。ニギノ命が天孫降臨された高千穂の峯の近くに位置する。「天皇生まれながらにして明達(さか)しく、意(い)かたくまします。」(日本書紀)とある。皇子原には隣接して狭野神社(さのじんじや)があり、イワレビコの幼少名は「狭野尊(サノミコト)」という。皇子原は宮崎平野を潤す大淀川の源流にあり、現在のえびの市と都市の中間に位置し、この一帯は水稲が可能である。都市やえびの市界限で初期稲作の石包丁や土器が出土しており、稲作先進地であったことに間違いはない。

この地域の出土品である貝輪(参照資料1-3)などから南西諸島との交流があったことが判っており、最近の米のDNA(プラントオパール)鑑定では日本の米はジャポニカ米であり、南西諸島経由のルートで稲作が伝来した可能性が高いと言われている。そのことは、イワレビコが吾田(あた)村の吾平津姫(アヒラツヒメ)を娶ることからも明らかになる。吾田村は薩摩半島西部で貝輪交易が盛んなところであった。それは吾田村の高橋貝塚から貝輪が出土することから分かる。貝輪とは沖縄周辺産の大型の貝から作る腕輪で、后や姫にとって高価な必需品であり、その流通は九州北部や瀬戸内海東部まで流通していた。イワレビコが東征をする財力は貝輪貿易による収益で力を蓄えたのかもしれない。天孫降臨したニギノ命が正室の木花之佐久夜毘売(コノハナサクヤヒメ)もこの地から娶ったと記紀に記述することから、歴史上で重要な地であったことになる。

東征開始時に、アヒラツヒメはイワレビコの足手まといになることを氣遣い、同伴せずにイワレビコを見送った。イワレビコを見送るアヒラツヒメの像が、現在の日向市油津港にある吾平津(アヒラツ)神社にあり、アヒラツヒメが祭神として祀られている。イワレビコの皇居は皇宮神社として宮崎神宮から西北

参照資料1-4: 神武天皇と大物主の系図(古事記ベース)

出典:『新道東征をいく』(産経新聞)



約六百メートル先の丘にある。イワレビコは十五歳になるとこの地に移り、四五歳で東征を始めるまでここに住んだ。地名起源の視点から「宮崎」とは宮(皇宮)の崎(前)の意味ではないかと言われる。皇宮神社は大和朝廷成立後、九州に下向してきた皇孫の建磐龍命(タケイワタツノミコト)がその縁に因んで創祀し、第十代崇神天皇の時代に社殿が創建された。

出雲の国譲りの後の神武東征の目的のもう一つは、出雲に替わつて葦原中国(あしはらなかく)を治めることにある。しかし、当時の大和は三輪山の主、大物主神(オオモノヌシノオカミ)の幸魂・奇魂である大物主大神(オオモノヌシノオカミ)の影響が強く残っていた。つまり出雲の国つ神の大物主神の関係者が多く居たことになる。

神武東征は、イワレビコが橿原宮(かしはらぐう)で初代神武天皇と称し、大物主命の娘と婚姻を結び、出雲勢力の支援を得て大和を治めることで完了し、国譲りが完結することになるのである。

これからの話の展開で必要になる神武東征に係る神々(参照資料1-2)を整理しておこう。イワレビコは三ギニ命の孫である鵜飼草葺不合尊(ウガキフキアエズノミコト)と海神(ワダツミ)の娘である玉依姫命(タマヨリヒメノミコト)の間に生まれた第四子である。長兄に五瀬命(イツセノミコト)、次兄に稻水命(イナヒノミコト)、三兄に御毛沼命(ミケヌノミコト)があり、イワレビコの東征に随伴する。イワレビコは二人の妻を娶る。日向に居た時の阿比良比売命(吾平津媛・アヒラツヒメ)、もうひと方は東征完了後、大和で大物主の娘、富登多良伊須須岐比売命(ホトタタライスギヒメノミコト)、別称は比売多良伊須余理比売命(ヒメタタライスケヨリヒメノミコト)である。長い名なので一般には、伊須余理比売命として使用される。

参照資料1-5:都農神社



出典: ウィキペディアから図柄引用

日本書紀では、イワレビコ^注の東征は塩土老翁(シオツチノオジ)に尋ね、翁が「東に美地(うましつち)あり。青山四周(せいざんしゅう)にもめぐれり」と云う。意味は、東方に青い山々に囲まれた美しい土地がある。その中へ天の磐舟(アマノイワフネ)に乗つてとび降りた者がある。とび降りた者は饒速日(ニギハヤヒ)というものである。そこへ行つて都を造るに限る。」と、この言葉を受ける。この地にはイワレビコと同様に、既に高天原から天孫降臨した同族神(天つ神)が居るということになる。イワレビコは「何れの地(ところ)に坐(いま)さば、天の下の政を平らけく聞(き)こし看(め)さむ。なを東に行かむと思う」と天下の政治を無事に行えるところを悩み、東に向かう決意を兄に語り東征を決意する。

ワレビコは^注四五歳の時、皇宮神社の北に位置する湯之宮神社で最初の軍議を開き、東征を開始する。湯之宮神社はイワレビコが東征の最初の宿泊地とされる神社で、最初の軍議を開いたとされるこの地に白梅の座論梅(ざろんばい)があり、隣接してイワレビコが湯あみしたと伝えられる御浴場之跡がある。

(注) 古代の年齢の数え方は魏志倭人伝にある「春耕秋収を記して年紀となす」にあるように、春に苗を植えて秋収穫するのを一歳とするから一年で二歳を取るようになる。雄略天皇の前までは二歳一年と見るのが適切と言われる。

第三話 大和思慕

三輪山の神、大物主神は三人の妻を娶っている。農耕神である三島溝咋(ミシマミヅクイ)の娘、勢夜陀多良比売(セヤダタラヒメ)との間に伊須気余理比売命(イヌキヨリヒメ)をもうける。神武天皇の后となる。その他に、倭迹迹日百襲姫命(ヤマトトトリヒモメ)は箸墓古墳に埋葬されたといわれる后であり、また活玉依比売(イクタマヨリヒメ)がいる。この比売は夜にしか会えない大物主命を見極めようと大物主命に糸を括り付け、翌朝括り付けた糸を辿つて夫君を見届ける。その時、糸が三輪に残っていたところから、その山を三輪山と名付けたという謂れのある比売である。神武天皇と伊須気余理比売命の間には三子があり、末弟の神沼川耳命(カミヌナカワミミノミコト)が第二代天皇として綏靖天皇(スイゼイトンノウ)を名乗る。吾平津媛(アヒラツヒメ)との間には二子があり、神武天皇の死後紛争を巻き起こす。

九州は宮崎から北九州の岡田宮まで、瀬戸内海の行程は岡田宮から浪速までになる。最初の逗留地は軍備の備えのための都農(つ)である(参照しりゅー)。

都農町に矢研(やと)ぎの滝がある。矢を研いで軍備を整えた場所と言われる。この地は山と海の距離が近いために食物が得やすい。また、矢研ぎの滝を上ると、尾鈴山(おすずやま)がある。この山には火成岩の石英斑岩(せきえいはんがん)があり、矢じりに適した石が潤沢に取れる。矢の材料になる矢竹も茂っている。当時、軍備で最強の武器である弓矢の準備に最適の地である。この地に都農(つ)神社(参照資料1-6)がある。祭神は大己貴命(オオナムチノミコト)である。大己貴命は出雲の大国主命の若年時の名前である。その場所で弓矢の準備をしたということは出雲の勢力と協力するという意思の表れと見ることが出来る。次に向かった地は美々津港がある美々津(みみつ)である。

美々津港は、イワレビコが船出された港ということで御津(みつ)と呼ばれたことが訛つて美々津になった(参照資料1-7)。大船に適した良港で船を作る木材、楠(くすのき)に事欠かず、技術を持った人がいる。立磐(たていわ)神社の辺りを中心に今も楠の群生林がある。楠は樟脳(しょうのう)油を含むため耐久性、保存性に優れている。元々、この美々津港に注ぐ耳川(みみがわ)流域は良木の産地であり、森林に恵まれ、現在でも宮崎県の森林面積の二十六パーセントを占める。

参照資料1-6: 耳川 美々津港、立磐神社



耳川、美々津港

出典: ウィキペディアから図柄引用



立磐神社

参照資料1-7: 参考図: おきよ祭り

イワレビコ船団の船出



あんこが外側に



つき入れ団子

出典: ウィキペディアから図柄引用



「おきよ！」起こし

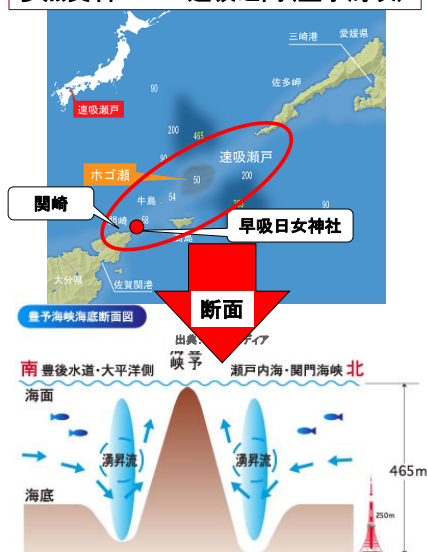
東征に向けた軍船を建造し、準備したものと想われます。立磐神社の祭神は、神武天皇の他に、住吉大社の三祭神と同じ底筒男命(ソコツツオノミコト)、中筒男命(ナカツツオノミコト)、表筒男命(ウワツツオノミコト)を祭る。大和朝廷が航海の三神として崇めた神であり、住吉大社の祭神です。この港にイワレビコの船出に関わる「おきよ祭(参照資料1-7)」が残っています。その謂れは、物見番から潮も風もちょうど良いの知らせがあり、八月二日の船出予定を一日に急きよ繰り上げ、八朔(はつき)八月一日午前四時に変更した。裏方は大慌てで、餛(あん)ともちが一緒になった団子「つき入れ団子」を作り献上した(参照資料1-7)。

料」)。子供たちが朝四時の出船に向けて、「おきよ！おきよ！」と言ってイワレビコ軍勢を起こして回る。つき入れ団子がお土産として今も売られている。戦前までは船出の様子も演出したらしい。そして、船出したイワレビコの軍団は大入島（おきにゆうじま）を廻り豊予海峡に向かう。

第四話 御船出

古代の船の能力では何度も港に停泊しながらの航海であった。美々津から豊国の宇佐までの間で、「居立（いだち）の神の井」、「大入島（おおにゆうじま）」、「速吸之門（はやすひのと）」の三か所に立ち寄っている。水や食料を補給したのである。居立の神の井は現在の佐伯市米水津（よのうず）にある。米と水を補給した港でありその行動が地名となっている。豊予海峡（ほうよかいきょう）に入る前には大入島に立ち寄っている。この地は元々水源の無い島であったが、イワレビコが島民の窮状を知って立ち寄り、地中深く弓を突き立て「水よ、いでよ」と祈念すると、清らかな水が湧き出したという。また島民はイワレビコが立ち去る時にたき火で見送ったという故事が残っている。井戸は「神の井」と命名され、焚火は「トンド火祭り」として現在も年一回催されている。イワレビコは水脈を知る井戸と灌漑の技術を持って伝えていったのであろう。

参照資料1-8:速吸之門(豊予海峡)



出典: ウィキペディアから図柄引用

豊予海峡は速吸之門（はやすひのと）と呼ばれる。現在は佐賀関の関サバ、関アジで知られる処である。大分県大分市（旧佐賀関町）の関崎と愛媛県伊方町（旧三崎町）の佐田岬によって挟まれる海峡で海峡幅は十四キロメートルしかなく、最大水深は約一九五メートル。日本最大の断層である中央構造線がこの岬の間に走るため、深層流との対流が起こる場所である。魚にとつては豊饒の海になるが、航海は難渋を究める。ここに、助っ人珍彦（ウズヒコ）が現れ、「天神（あまつかみ）の子来（い）でますと聞（うけたまわ）り、故に即ち迎え奉る」と言い、イワレビコ軍船の先導役を務める。海の豪族と想定できるが、東征ではイワレビコの側近的角色を終始果たしていく。後に大和の国造（くにみやつ）の祖として取り立てられ、イワレビコは「稚しひ根津彦（おしひねつひこ）」の名を与えている。

参照資料1-9:速吸日女神社(蛸神社)



参照資料1-10:宇佐神宮



この豊予海峡の佐賀関半島の関崎(せきざき)に早吸日女神社(はやすみめじんじや)があり伝承が残っている(参照資料1-8)。その伝承とは、この海峡を通る時、急な風雨と荒波に襲われた。椎根津彦(しいねつひこ)が海面をのぞくと、海底から異様な光がさしていた。そこで、従えていた海女の姉妹を潜らせると、光の源は神剣で大蛸が守護していた神剣を差し出した。この神剣はイザナキが絶えず佩(は)いていたもので、権現礁(ごんげんべい)で禊(みそぎ)の最後に海底へ沈めた。大蛸はその神剣を預かり守護していたものである。大蛸はイザナキの子孫が来たことを喜び神剣を返したのである。

海女の姉妹はその神剣をイワレビコに届けると長時間の潜水がたつて息絶えてしまう。イワレビコは海女の姉妹を手厚く葬り、神剣をご神体とする小さな祠(ほくら)を建て、イザナキが禊の時に生まれた八十枉津日神(ヤソマガツヒノカミ)を祭神として建国の大請願を立てたと伝わる。早吸日女神社はやすひめじんじやでは、参拝者が願ひ事が叶うよう蛸の絵と蛸を食べない期間を書いて貼る。「蛸断ち祈願」と言われる。同神社の三十九代宮司の小野氏は代々一生涯蛸を食べないと云うから蛸断ちが千年以上続いていることになる。この関崎を廻ると宇佐に着く。

イワレビコは杓鼻(かじはな)の地に上陸し宇佐へ向かったと書紀にある。宇佐は豊国(とよくに)と言われ、宇佐の民は宮を造り歓待した。現在の宇佐神宮の場所になる(参照資料1-10)。「宇沙都比古(ウサツヒコ)・宇沙都比売(ウサツヒメ)は足一騰宮(あしひとつあがりのみや)を造り、大御饗(おおみあえ)を献(たてまつ)る。」と古事記に記される。注一 騰宮とは片方の一柱が川の中あつた宮殿ということを表している。(注)宇佐神宮を周る寄藻川(よしもがわ)があり、この川沿いに足一騰宮の遺跡が残っている。

この歓待にイワレビコは喜び、家臣の天種子命(アマノタネノミコト)に宇沙都比売を娶ることを進める。地元有力者と家臣の姻戚関係は宇佐が支配下にあり、大和との関係も深かったことが分かる。天種子命は三ぎる



血筋である(コラム参照)。宇沙都比売(ウサツヒメ)が天つ神と婚姻できるということは天つ神に関わる一族であるということになる。

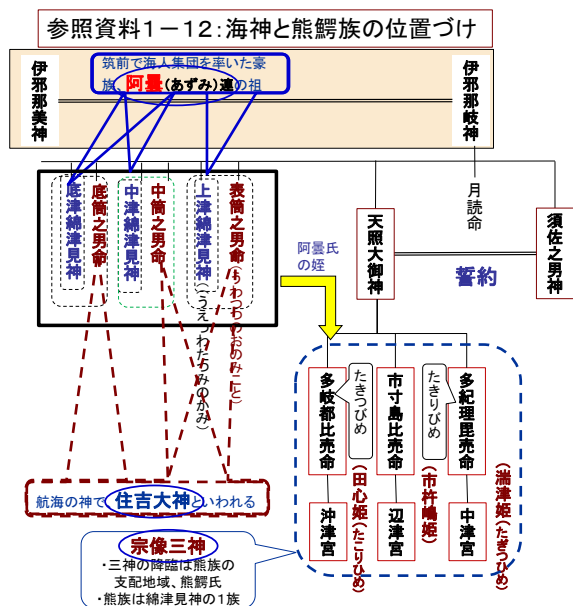
宇佐市には九州最古と言われる三世紀後半の前方後円墳、赤塚古墳がある。三世紀後半と言えば大和の最初の前方後円墳が三世紀中葉と言われているので、ほぼ同時期に構築されたものである。副葬品として三角縁神獸鏡四面・三角縁龍虎鏡一面、碧玉管玉、鉄刀片、鉄斧などが出土している。銅鏡は、椿井大塚山古墳(京都府)、石塚山古墳(福岡県)、原口古墳(同)出土のもの^注と同範鏡(どうはんきよう)である^注とされており、初期のヤマト王権が各地の首長に与えたものであると考えられている。(注)「同範鏡」の意味は同じ鑄型または原型から作られた鏡のこと。

このことから、日向と宇佐は海路を通じてかなりの親密な交流があり、大和朝廷に忠誠した、あるいは同族の国家だったと考えて差し支えないであろう。宇佐を發つと次の寄港地は岡田宮(おかだのみや)である。

岡田宮(筑紫)は、現在の北九州市八幡西区にあり、関門海峡に接した場所にある。イワレビコは竺紫(つくし)の岡田宮(参照資料一)で一年間滞在する。北九州の要衝の地で抑えておかないと大和への航路を確保できなくなる地である。岡田宮の伝承によれば、岡田宮は岡地方(おかしほう・遠賀郡)を治めていた熊族が祖先神を祭っていた社(古事記)と言

われる。元宮の一宮神社にはイワレビコが祭祀を行った祭場跡「磐境(いわさか)が残る。

祭神に神日本磐余彦命(神武天皇)を筆頭に、岡田の宮の右殿の熊手宮に大國主命、少名彦神、県主熊鰐命が祭られている。宮司は熊鰐命(クマワニノミコト)の末裔の熊鰐氏である。この祭神を見るとこの関門海峡を当時は熊鰐族が牛耳っており、祭神からは出雲の大國主命の支配から、大和朝廷の支配へと変わったことが推察できる。愈々、中国地方の安芸に向かう。大和朝廷発足後、県主に任じられたということは臣下の礼を執り協力したということである。この地の滞在の一年いたのは、熊族は海を中心の生活だったから、イワレビコがコメの安定性を教え、より幸せになれると思わせるために、稲を実際に栽培して伝授した一年という可能性が高い。米は一粒で三百粒を作り出す非常に生産性が高く、安定性のある作物であった。岡田宮の祭神の熊鰐命は熊族の祖神であり海神(ワタツミ)である。海神は紀元前から古代大和が出来るまで北九州の沿岸を中心に活躍し、最先端の武器、操舵術、文化を有していたと思われる。



出典：古代筑紫三家族の謎(gooブログ)、「古事記」(竹田恒泰著、学研)

記紀で伝えている系譜(参照資料1-12)をみると、伊邪那岐命の禊で、阿曇の神が成った直ぐ後に住吉の神が成ることから阿曇族が最初の海神であり、その弟神として住吉族が出てきたことになる。さらに、伊邪那岐命が禊で目を洗った時成った神が天照大神であるから、綿津見三神と住吉三神、天照大神は人間の世界では兄弟神になる。その天照大神と弟の須佐之男神の間の誓約(うけい)で多岐都比売命(たきつひめ)のみこと、市寸島比売命(いちすくしまひめ)のみこと、多紀理毘売命(たきりひめ)のみこと(の宗像三神)が成る。(注)仏菩薩または神が、衆生を救済しようとする、その誓い。綿津見三神と住吉三神から見れば人間界でいえば姪に相当するから宗像族はより後に阿曇族から分岐したことを表している。この三女神は宇佐大社の祭神の一つである比売大神と宗像大社の祭神である。このように見えてくると、要になる関門海峡を占めていた熊族は北九州の文化が大和に移動する時の神武東征で記述されるのだから、住吉三神の後に阿曇氏から分岐した一族といえる。

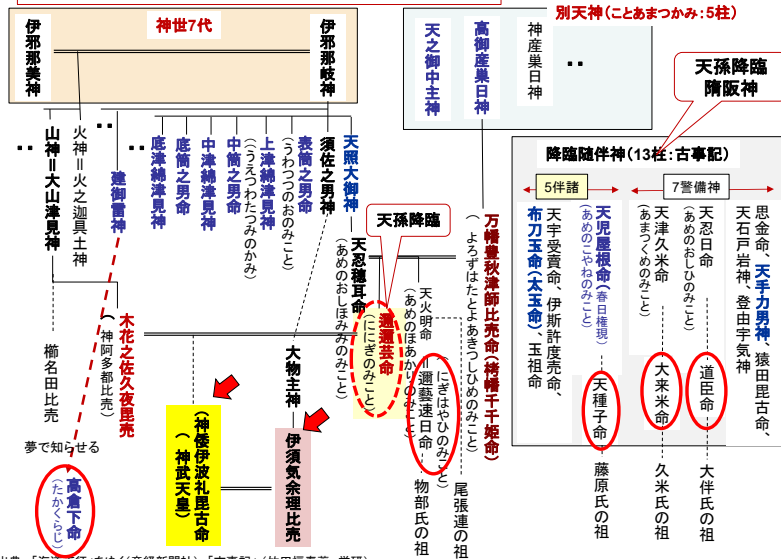
それは北九州の沿岸部を中心として銅器、鉄器、陶磁器、古墳等の遺跡が集中することから判断できる。最古の倭国に対する記述は後漢書で紀元前五十七年に贈った「漢奴倭国王の金印」の記述である。このことから、この年代以前に大陸との交流が活発に行われ、そのための渡し神と言われる船頭海神が居たことになる。金印は志賀島で江戸時代に発見されたがこの地に志賀海(しかうみ)神社がある。将に海神(わたつみ)にはもつてこの玄界灘の荒波を避ける良港の地形である。祭神は上津綿津見神(ウツツワツミノカミ)、中津綿津見神(ナカツツワツミノカミ)、底津綿津見神(ソコツツワツミノカミ)の三神である。この神裔(神の子孫のこと)が阿曇(あずみ)族であると社伝に記す。一説によると奴国(なこく)はこの阿曇族が持つていた国ではないかと言われるのは頷ける。

記紀によると綿津見三神は伊邪那岐命が黄泉(よみ)の国から逃げ帰り、筑紫の日向の小戸の橘の櫓原(あわきはら)で禊(みそぎ)をされた時に、海の表面(上津)、中ほど(中津)、海底(底津)で綿津見三神が成ったと記す。そして、綿津見神が成った直ぐ後に表筒之男神、中筒之男神、底筒之男の神の住吉大社の住吉三神が成っている。この注神裔(しんえい)が住吉族になる。(注 神の子孫のこと)

コラム：「神武東征で臣下として係る神々系図」

イワレビコ(神倭伊波礼毘古命)は須佐之男神の六代目の出雲の大神に当たる大国主命の幸魂(さちみたま)、奇魂(くしみたま)である大物主神(オオモノヌシノカミ)の娘である伊須氣余理比売(イスケヨリヒメ)と結婚し、橿原宮

参照資料1-13:神武東征で関係する神々系図



出典:「海運東征」をゆく(産経新聞社)、「古事記」(竹田恒泰著、学研)

(かしはらぐう)を建て神武天皇として初代天皇となる(参照資料1-13)。大国主神の幸魂・奇魂である大物主神は三輪山の神であるから、大和の地を治めていたのは出雲を中心とした勢力であったことが分かる。イワレビコは出雲勢力との調和を執ったのである。

神武東征での同伴者は三人の兄のみではなく、天孫降臨の随伴神の子孫がイワレビコの臣下として同行する。

天兒屋根命(アメノコヤネノミコト)の子孫で藤原氏の祖になる天種子命(アマノタネノミコト)、天津久米命(アマノツクメノミコト)の子孫で久米氏の祖になる大来米命、天忍日命(アメノオシヒノミコト)の子孫で大伴氏の祖になる道臣命(ミチノオノミコト)である。古代大和発足時の側近の豪族である。

熊野路でイワレビコの軍団が熊野の神の毒氣に当たり倒れた時、高天原の建御雷神が一横刀(たち)を下ろし、イワレビコに届けさせたのは高倉下命(タカクラジノミコト)、そのことでイワレビコ軍団は窮地を脱する。

東征の最終地、城島(しきしま)で対抗する長髓彦命(ナガスネヒコ)の軍団を引き連れイワレビコに投降するのは三ギノ命の兄神の天火明命(アメノホアカリノミコト)の子孫、邇藝速日命(ニギハヤヒノミコト)である。物部氏の祖神と云われ、古代大和で軍事と祭祀の二大機能を持ち勢力をふるうことになる。

以降省略

参考図書

- ＋「海道東征をゆく」(産経新聞社)
- ＋続「海道東征をゆく」(産経新聞社)
- ＋「日本書紀」(宇治谷 孟著、講談社)
- ＋「古事記」(竹田恒泰著、学研)
- ＋「住吉大社」(住吉大社編、学生社)
- ＋「神武天皇の真実」(田中英道、扶桑社)
- ＋「神社由緒」(宇佐大社、岡田宮、志賀海神社、宗像神社)

おわりに

イワレビコ尊による「神武東征」、小生が古代史を勉強始めたころはこの東征の記述は作り話と思っていたのですが、現在は事実に基づいた行動であると確信しています。そう確信した理由は次の三点の根拠からです。

一点目は、記紀に記述されている事象、場所・地域、国つ神などほとんどすべてに裏付けがあり、現存していることです。東征の行程で起こった事象はその地の伝承・言い伝えや祭り、神社として残っていますし、イワレビコ尊が立ち寄った場所・地域名は現在もほぼ完全に残っています。国つ神に関しても神武東征を支援した国つ神は大和朝廷確立後に県主や国造としてその氏名が記述され後世まで残っている。当時の情報伝達網を考えると、五世紀ころまで馬はなく、船による伝達が最速の指令網であったことからすれば、記紀編纂時の八世紀にすべての伝承地と記紀の記述の整合性を取ることは不可能に近い。現地でその伝承が残ったと考えるのが常識的です。

二点目は、高天原の中核にあり、初代天皇になるイワレビコ尊の皇軍であるにもかかわらず難波でナガスネヒコに敗れ、熊野へ回航する。そして、熊野から大和を目指す行程でも三人の兄を亡くし随所で苦戦し、苦しみながら歩を進めて行軍している。皇軍には見苦しい状況でありながらありのままに日本の正史である記紀に記述している。神武東征は出雲の国譲りの後、瓊瓊杵尊(ニギノミコト)の天孫降臨、そしてイワレビコ尊の神武東征になるが、大和には出雲に關係があり、国譲りに抵抗する国つ神が居たことを表している。出雲から遠く離れており、三輪山を中心とした出雲勢力があったことから、出雲の国譲り後も出雲の残存勢力が大和に残っていたことはありうる事柄と納得できます。

三点目は、神武東征の前に大和に降臨している饒速日命(ニギハヤヒノミコト)は出雲の国譲りの前に降臨しているが、大和を抑えきれない状況がそのまま記述されている。すなわち、イワレビコ尊の東征を受けて高天原の勢力が大和を治めていったことが理解できます。

記紀によるこのような記述をみれば、神武東征が現実的に起こりうる状況を反映していることから、現実には遭遇した皇軍の苦難を後世にも伝達した事実の記述と考えられる。

【著者略歴】 井上正和(いのうえまさかず)

熊本大学工学部、九州大学大学院工学研究科卒業後、1971 年日本 IBM(株) 入社し SE 部門に配属。1992 年、中小・中堅企業コンサルティング部門を立ち上げ、責任者としてコンサルティングプロシージャの普及を図る。

2001 年に独立し、有限会社 情報戦略モデル研究所を設立。

経営戦略や IT 戦略の策定や構築に係る書籍出版、研修とコーチング支援、業務プロセス改善・改革に係る研修とコーチング支援などを多数手掛ける。2011 年 4 月 神奈川工科大学で「情報と文化」講座で古代史講義を担当した時から、記紀を始めとした古代史に取り組み、素人の観点から古代史研究を開始し、現在まで16年間、16シリーズ(各 5 回講座)を開発し、古代史の講座を横浜市地区センターを中心に、学者ではない素人にでも分かる古代史セミナーを開催し好評を得ている。今後オンラインでの全国展開を計画している。

古代史シリーズ3「神武東征と国つ神」

発行日 令和7年6月吉日 初版発行

著 者 井上 正和

発行所 有限会社 情報戦略モデル研究所

〒226-0006 横浜市緑区白山2-2-E-216

TEL:045-934-7254

URL: <http://www.ism-research.com/>

本書は、法令の定める場合を除き、複製・複写することはできません。

●本著の読者お問い合わせは下記を参照ください。

お問い合わせ: ism.researchbook@gmail.com

ISBN 978-4-9912583-3-6
C1021 1000E

発行: 情報戦略モデル研究所
価格: 本体価格 1,000 円 + 税

ISM
研

主な内容
はじめに 第1章 「イワレビコの出征・出立」 第2章 「岡田宮から浪速へ」 第3章 「ナガスネヒコとの戦い」 第4章 「熊野八咫鳥の導き」 第5章 「大和施政の始まり」 おわりに